子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2010年7月　NO.156

「水の環（わ）」　植木栄造

〈もくじ〉

平和の音色に耳をすませて ～2010ピースウェイブの成功に向けて～ …… 岡村正弘　2
幕末出島と坂本龍馬 …… 杉本茂喜　3
「浅春」にひかれて …… 加藤秀弘　4～5
土のにおい、あたたかな日々　桐島畑の私の暮らし …… 大串妙子　6～7
ウルマー・カンマー・アンサンブル20年の歩み …… 磯村寿彦　8～9
鉄道っておもしろい！(3) …… 大内雅博　10
言葉の現場から22　「舞姫」のなぞを読み解く(2) …… 広井　護　11
高知市文化振興事業団　5月～6月の事業から …… 12～13
風俗歳時記・風伯 …… 14～15

(財) 高知市文化振興事業団

平和の音色に耳をすませて

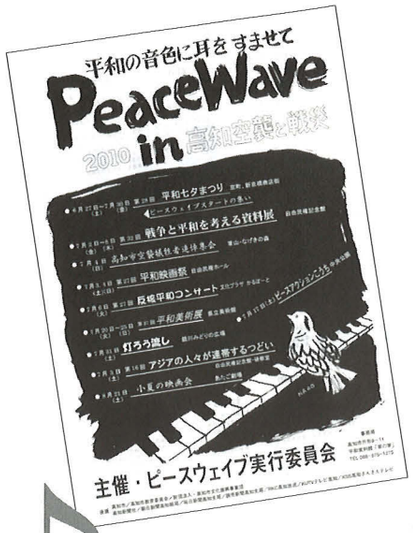
～2010ピースウェイブの成功に向けて～

岡村正弘

一　九四五年七月四日、高知大空襲の日から三十四年目を期して始めた「高知空襲展」から、今年の空襲展「戦争と平和を考える資料展」は三十二回目になりました。第一回は市民図書館で、県下全域から寄せられた戦争の悲惨さを物語る資料や遺品などを展示し、八千人を超える人々が来場しました。

あの夏から三十二年間、毎年欠かさず続けてこられましたのは、郷土の戦火の、「ここも戦場だった」体験と記録を語り伝えたいという体験者の強い思い（願い）と、「わが町に絶やしてはならない初夏の催し」という、物心両面で幅広い県民市民のみなさんの力に支えていただいたからでした。

その間に、「平和七夕まつり」「反核平和コンサート」や「平和美術展」も始まり、一九九六年から各界の平和・文化活動を結集した「ピースウェイブ」（平和の波）へと発展してきました。



資料展では毎年、なにかテーマを持たせたものになるよう努めています。

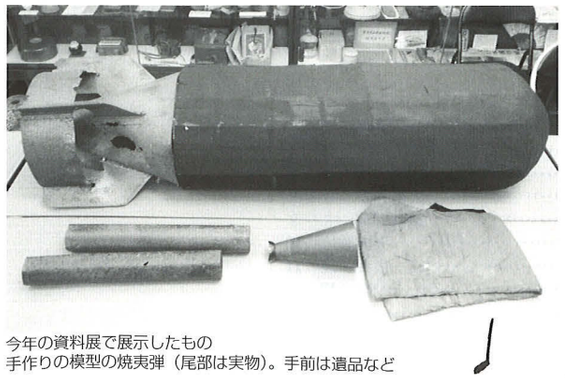
今年の資料展では、戦争に至る経過を年表にし、その中に韓国併合百年の特徴点を含め、戦前、戦中、戦後、現在と時代区分が解るようにしました。加害、被害、抵抗とそれぞれを展示し、現在の紛争としてイラクの問題、米軍と自衛隊、普天間基地問題など、喧々諤々楽しく論議しながら、「地域に根ざす」こと、「身近」なことにこだわり続け、自分たちの足もとから地域、日本、世界史の課題に迫っています。

私たちは、国際的・歴史的な視野を持つという立場と、自分たちに身近な戦争と平和を語り継ぐという、ふたつの立場から、今年は十余りの行事を運ぶ平和の波―2010ピースウェイブの成功に向けて取り組んできました。

ピースウェイブの行事はたくさんありますので、多くの県民市民のみなさんに参加していただきたいと思っています。どうぞご家族ご友人と誘い合ってご参加ください。平和の音色に耳をすませて――。

（おかむらまさひろ／平和資料館・草の家館長）

平和への願いが込められた約100万羽の折り鶴が飛びかう平和七夕まつり（昨年の様子）


今年の資料展で展示したもの
手作りの模型の焼夷弾（尾部は実物）。手前は遺品など

幕末出島と坂本龍馬

杉本茂喜

出島和蘭商館跡（西から）

カットガラス脚付蓋付鉢

長崎県長崎市にある国指定史跡「出島和蘭商館跡」では、平成二十二年七月十六日から平成二十三年一月十日の会期で、第十二回企画展「龍馬と海と出島」を開催します。

出島は鎖国時代、西洋に開かれた唯一の窓口として、日本の近代化に大きな役割を果たしました。しかし明治以降、出島周辺の埋め立てが進み、一九〇四（明治三十七）年、海に浮かぶ扇型の出島はその原型が失われ、以来、市街地の中に埋もれてしまいました。現在、出島は一九世紀初頭の復元整備事業が進められ、十棟の建物復元が完成し、また石垣などの周辺整備も進めています。今後逐次復元を行い、最終的には二十五棟を復元予定です。

今回の企画展では、海と船をテーマに出島と坂本龍馬を結び、オランダ帆船と海軍伝習所、幕末の出島商人と龍馬の関わりについて紹介します。

日本には、一六〇〇（慶長五）年に最初のオランダ船リーフデ号が豊後の佐志生（現・臼杵市）に漂着しましました。その後もオランダ船は九州を目指して航海してきました。一六四一（寛永十八）年以降は、長崎だけに入港が制限されたため、長崎出島に来航し、幕末にいたるまでに八百隻を超すオランダ船が来航しました。船の種類としては、フロイト船（貿易のために貨物の積載スペースを考慮して造られた商船）、スヒップ船（貨客船あるいは軍艦仕様の船）がありました。一八世紀初頭からはスヒップ船が中心となり、一八世紀中頃以降は重量一〇〇〇トンを超える船が来航しました。一九世紀中頃になると、船は蒸気で動く時代を迎え、観光丸や咸臨丸のような大型の汽船が来航しました。

古くから海外への窓口として栄え、外交の拠点としての役割を担った長崎は、幕末の激動期にあっても、通商を求める異国船が頻繁に来航し、幕府の対外政策の中で、重要な港として位置付けられていました。こうした情勢の中で、海軍の創設を実現すべく、蒸気軍艦による伝習計画を話し合い、長崎海軍伝習を開始しました。練習生として勝海舟、佐野常民、五代友厚、榎本武揚など、日本の近代化に大きく貢献した人物らが参加しました。

一八六二（文久二）年に勝を訪問し、弟子入りをした坂本龍馬は、薩摩藩の援助を得て、一八六五（慶応元）年に長崎に亀山社中（のちの海援隊）を設立します。坂本龍馬が隊長を務めた海援隊は、軍艦や武器の購入など、長崎を拠点にさらに商社として大きく展開します。この海援隊と出島の蘭商ハットマンとの間において、小銃の取引が行われたことが『海援隊商事秘記』に記録されています。この文書によると一八六七（慶応三）年九月十四日にライフル銃千三百挺を買い入れる契約を結び、翌日、出島にてライフルを受け取っています。現在、一部復元され考古館として公開されている旧石倉がまさに龍馬達が買い入れたライフルが保管されていた倉庫でした。

坂本龍馬が長崎で活躍した幕末の頃、出島は、二百年以上続いたオランダ商館が廃止され、新たに外国人居留地に編入され、これまでとは異なる枠組みのもと海外貿易を行う場として、新しい時代を迎えました。

本企画展を通じ、シーボルト達が活躍した一九世紀初頭の出島とは違った幕末の出島の魅力も発見していただけたら幸いです。

（すぎもとしげき／長崎市文化観光部出島復元整備室）

『浅春』にひかれて

加藤秀弘

文化高知99号に中山俊子さんが情緒深くまとめられているように、昭和二十五年まで高知城北方の小津町には、豪気でならした旧制官立高知高等学校があった。旧制高校は、明治十九年の高等中学校令（後に高等学校令が布告される）によって明治政府が世界に雄飛する人材を育成するための登龍門として設立したものである。当初、第一高等学校から第五高等学校が設立され、後に第六から第八高等学校が続き、更に大正年間になって地名が冠されたいわゆる地名高を増設し、全国で計三十三校※（官立二十七、府立二、私立四）が設立された。帝国大学への進学課程的色彩が強く、年代によって差があるものの卒業生はほぼそのまま帝国大学に進学できた。しかし、旧制高校の特徴はこのエリート的境遇にばかりあるのではなく、某氏によって〝カントよりも哲学的〟と賞されたその内面への探求と思考、自由で闊達な教育にあった。その内面の発露が、寮歌ということになろうか。

北大恵迪寮生時代の筆者

旧制高知高校の代表寮歌は、中山さんも言及されている「豪毅節」と、全国的知名度からすれば「人絢爛の」であろう。「豪毅節」に至っては全国の旧制高に流布されるどころか、相当に後の時代の流行歌、守屋浩の唱う「大学かぞえうた」にまで発展継承された。この「豪毅節」は、通常の唱われ方はどこの旧制高校にもあったストームの伴奏歌としてである（いや、歌があるからストームが発生するのかも知れない）。某先輩によると、高知高校のストームは脚の振り回しが他校より一段高く、よそ者は直ぐにへばるので容易に識別できるとのことなので、その激しさが知れようものである。一方寮歌には、これと対極をなすような叙情的な歌も多くあり、筆者の趣味もあるが高知高校では「浅春」をその筆頭にあげたい。

筆者は、昭和四十年代後半の学生時代には札幌農学校寄宿舎に源とする北大恵迪寮で過ごした。北大はクラーク教頭で名高い札幌農学校を草創とし、東北帝国大学農科大学そして北海道帝国大学と発展したが、他の内地帝国大学と異なりその進学課程として旧制高校に相当する直属予科を備え、北大へは大半はその予科から、少数が他の旧制高校等から進学した。従って、戦後の学制改革においては旧帝大部分が新制大学学部課程へ、予科は同じく教養部に移行し、他大学（統合に際しトラブルが多々あったようだ）に比べると誠にすんなりと変革がなされた。その予科（後の教養部）には恵迪寮があり、日本の三大寮歌の一つにあげられる明治四十五年作歌「都ぞ弥生」があり、統合の際のスムーズさもあってか、時代を経て今日まで寮生学生の間では違和感なく歌い継がれ、学生運動が華やかなり折ももちろん、こともあろうか恵迪寮では平成二十年代に至っても現役寮生によって毎年寮歌が作られている。筆者も昭和四十年代後期に一歌を残したが「都ぞ弥生」と大きく異なり、本人すらも思い出せぬ泡沫歌にすぎない。

故あって、筆者はある縁者のおかげで「豪毅節」のみならず「浅春」を知っていた。寮生時代には、「浅春」の歌詞とメロディーの味わい深さにしばしば感銘していた。しかし、恵迪寮寮歌と異なり唱和する仲間もおらず、時と共に記憶は薄れ、長い間「浅春」を口にすることはなかった。再び、その歌が口から出たのは、それから実に二十五年後のことである。

※旧制高校相当としてその他大学予科等があり、戦後には特設高校も設立されていた

当時、水産庁遠洋水産研究所で鯨類資源研究を担当していた筆者は、いろいろな経緯もあり、高知県水産試験場と共同して土佐湾に回遊するニタリクジラの生態調査にあたることになった。良い人々とも巡り会い、学術的にもかなりの成果もあった。そして、地域産業の振興にもある程度貢献し得ると実感した時点で、現場から撤退し、後進に後を委ねることとした。最後の航海には、ニタリクジラの世界的権威で師匠筋にあたる英国人研究者を高知にお招きし、土佐のニタリクジラを見ていただいた。当初の目的は全て果たしたと思ったその時、船上から陸に目をやればそこには土佐の山並みが青々と横たわっていた。そして、自然と「浅春」の一節が口元から出た。

ふるさとの山河の　しりへ消えゆく見れば　猛き心いつしか　双の眼涙こぼれぬ

「浅春」は旧制高知高校南溟寮昭和十五年度寮歌。八節までの全歌詞から察するに以下のような訳となろうか。「そろそろ卒業も迫るころとなり、三年間の高校生活とも別れの時が来た。とりわけ寮生活での懐かしさが偲ばれる。そして、今、故郷とも慕う土佐の山並みを見れば、前途に対し雄々しき思いはあるが、惜別を思うと自ら涙がこぼれてしまうのである」。私の口元からこぼれた歌は、最後の第八節となる。この故郷の山に対する情景は、やはり山並みは土佐の山並み、つまり四国山地である。そうなのだ、寮歌はやはりその場に身を置き、そして何事かを成させねば本当の良さは分からないのだ。そう思った瞬間に、二十五年間の空白が埋められる思いがした。

その時のことが、学術論文と別に、ニタリクジラとその周辺を紹介する一般書を書きたいという気持ちにつながり、その時の思いも少しだけ盛り込みたいと思った。そして、多くの人のサポートにより平成十二年に『ニタリクジラの自然誌』（平凡社刊）を上梓し、本当にはからずも翌年の第十一回高知出版学術賞を頂戴した。いまだに、その時の内面からゆっくりと湧き上がってくるようなたおやかな喜びが忘れられない。

旧制高校は昭和二十五年三月に最後の卒業生を送り出して廃止。官立高知高校の唯物的資産と知的資産は新生高知大学の文理学部（後に理学部と人文学部）に引き渡された。

しかし何故、旧制高校が消え去ったのか？　明治以来の官僚組織と社会組織の頂点を形成した封建的教育制度を改めるため、教育の大衆化のため、進駐軍教育局が廃止を進言したとも、あるいはその周辺にいた当時の文部族の進言とも言われている。確かに、そうした側面もあるかも知れないし、少数のエリートを偏向した弊害もあったであろう。しかし、そうだからと言って、全てを否定することはなかったのではないか。自由で闊達な思想教育と少数精鋭の英才教育はたいそう稀少で、今ではもう存在もし得ないし、一度失われた文化的資産はもう二度と得られない。旧制高校は、権威主義ではあったが、最も批判されるべき権力主義ではなく、戦中にあっても全体主義ではなく自由主義であった。考え方は英国のパブリックスクールに近く、廃止される理由も必要もなかった。旧軍の解体は当然のこととしても、戦勝国（あるいはある勢力）は強国日本のポテンシャルを根本から断っておきたかったのではないだろうか。つまり、他の学制がある程度維持される中、旧制高校はある意味での敗戦責任をとらされたかのようであり、責任あった人々の公職追放が解かれても、旧制高校は復活しなかったのである。

クジラ類を分かりやすく解説した啓蒙書として評価された

筆者が勤務する東京海洋大学は、平成十五年に東京水産大学（現海洋科学部）と東京商船大学（現海洋工学部）が統合して誕生し、現在では他の旧国立大学同様に国立大学法人となって新時代を迎えている。両学部それぞれ明治初期に草創した古い学校を学祖としており、当然ながら共に伝来の寮歌を持っていた。しかし、筆者の勤務する海洋科学部では、卒業後に航海士を目指す水産専攻科を含めても大半の学生は伝来の「水産逍遙歌」を知らず、ごく一部の運動部に所属する学生がその歌を知るのみとなっている。これは戦前戦後の境目でも、学生紛争時代のギャップでもなく、その後の時代の流れの中で自然に退潮したものである。

新生・海洋大学の校歌も大変良い歌であるが、コンパの締めに唱うことはない。思った以上に学生は歴史の重みを実感しているのであろうか。この点だけは、今なお学生教員共に共通の歌「都ぞ弥生」で締める北大に軍配を上げざるを得ない。もちろん、昨今の学生は寮歌がなくても何も困ることはない。しかし、共に同じ目標に向かい、そして、あることを成した暁には、共通の歌で喜びや悲しみを分かち合いたいではないか。また、そうした彼らには、あの「浅春」のような情操を豊かに唱い上げる寮歌を知らせてあげたいのである。高知大学のどこかに、あの「浅春」が歌い継がれていることを願ってやまない。

（かとうひでひろ／東京海洋大学教授）

土のにおい、あたたかな日々
桐島畑の私の暮らし

大串妙子

四万十川と予土線が、むくむく連なる山に挟まれたところ〝とおわ〟（現四万十町）に「桐島畑」はあります。

桐島畑では、農薬や化学肥料は使わず、野菜の育ちを見守り、必要なときにだけ手を貸す。そんなおおらかな、自然の力を引き出す野菜づくりをしています。

生まれ育った東京から、桐島畑で野菜づくりと自然に寄り添った生活を身につけるため、愛車の軽自動車に家財道具一式をつめ込んで、単身、とおわへ引っ越してきて十か月が経ちます。

とおわの生活は、私の考え方や感じるもの、暮らし全体を、がらりと豊かに変えてくれました。

桐島畑は少量多品目の輪作のため、畑にはいつも十何種類かの野菜があります。季節に合って育った野菜は無理がなく最も美味しく、力強い。私は野菜はすべて、桐島畑で種の頃からのお付き合いのものをいただいているので、そんな野菜を毎日食卓で楽しむことができます。

春には甘くてやわらかい菜花や豆に山菜、夏は茄子にピーマン・トマトに胡瓜、秋にははほくほくの芋にきのこに栗、冬は甘ぁい白菜・大根・蕪……。一年を通してその時期時期が楽しみで待ち遠しくなります。旬を楽しめることは、とても自然で贅沢で、うれしいことです。

食の他にも、とおわでは四季に合わせて、暮らしのすぐ側のものたちも、はっきりと面持ちを変えてゆきます。

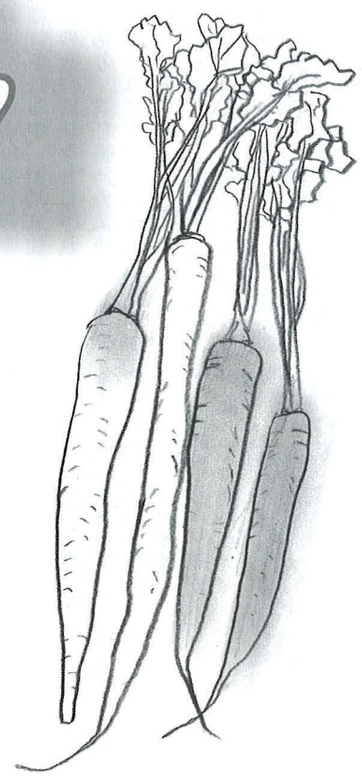
絶え間なく耳に届く夏の蛙の合唱が、秋には虫達に変わり、笛のような鹿の鳴き声が気になりだしたらいよいよ冬の入り口、拙い鶯が鳴き方の練習をし始めて春のきざしです。

水の物腰も変化に富んでいて、切ないほどキツく当たる冬から、やんわりと丸くなって春、もっとしゃきっとしてほしくなる夏、シャンと引き締まりだしたら秋が来ます。

秋には大根や柿を干し、もっと寒くなったら餅や蒟蒻をつき、山が芽吹きだしたらお茶摘みに梅干し・らっきょうを漬けて…、と年中手を使って〝つくる〟楽しみが続きます。

こんな自然の流れに乗っかった生活をしていると、ちゃんと季節の変化と一緒に体も変わることを知り驚きました。季節の変わり目には必ず体調を崩すようになったのです。まるで脱皮するみたいでおもしろい。

この前も三、四日食べものを体が受けつけてくれず、梅干しの力を借りて、ようよう季節に追いつきました。しんどくても、ちゃんと大きな循環のなかにいるんだなぁ、と、不思議とじんわり安心した気持ちになり、しあわせを感じます。



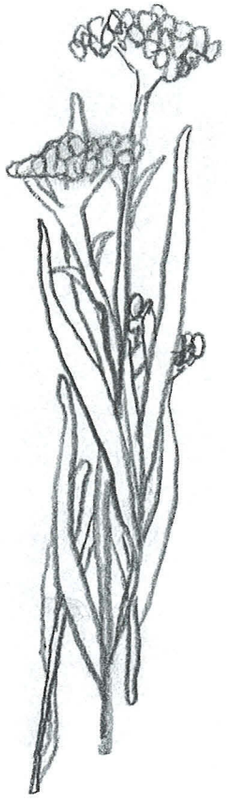
街での暮らしは出口がなく、いつも朝が憂鬱でした。一年はのっぺらぼうで、朝も夜も境界が曖昧でした。

そんな暮らしのなか、私は小さな自給自足を夢見ていました。土に触れ、自分の手で種を蒔き、季節に添ったものを食べ、暮らしに必要なものをつくれるだけ自分の手でつくり、自然の流れに合わせて生きられたら、今より貧乏でも幸せだろうなぁと思っていました。

「とにかく、このよぼよぼの私をなんとかしなくては！　他の命を分けてもらって〝食べる〟ことで自分が生きていることをもっと実感しなくては！　もっと土や空や風や太陽に触れられるところで生きていかなくては！」と焦りました。

そんなとき、知人のつてで、高知で無農薬の農業をすすめている会社・高生連の松林さんを紹介してもらい、桐島畑に引き合わせてもらいました。そして、桐島畑の主人・正一さんとおかみ・美郷さんに、「本当にやりたいんだったら、うちに来てもいいよ」と言ってもらえたのです。夢見たことは、想いが強ければ強いほど実現すると知りました。

夢叶った私の小さな生活は、今、桐島畑で働かせてもらって成り立っています。



仕事は暮らしです。仕事が好きなものであればあるほど、生きている日々が楽しく、穏やかになります。桐島畑で働くことは、今、私の良い栄養になっています。だから、毎朝笑顔で家を出ることができるのです。

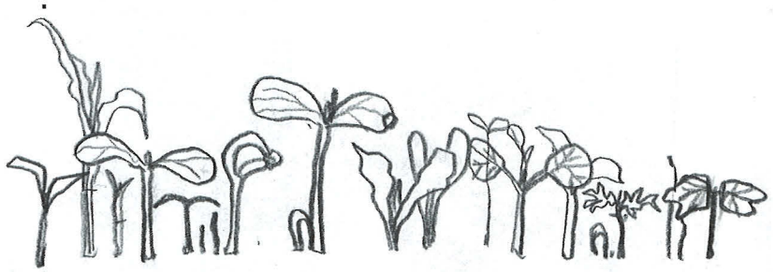
正一さんも美郷さんも、三才の息子の耕平くんも、ばあちゃんもじいちゃんも、ゆったりと大きく温かいひとです。私の仕事や、ひととしての成長のスピードをちゃんと見て、それに合わせて育ててくれます。

桐島畑に来たばかりの頃、使えないやつだと思われたくない、捨てられたくないと、夕暮れの帰る時刻になっても草引きを続けようとしたことがありました。そのとき、「今日どこまでやらなきゃいけないなんてことはないんだから、また明日続きをやろうや」と言われ、ほっとしてうれしかったのを覚えています。野菜もひとも同じに、無理させず、個々の流れでじっくりと成長させてくれることが、とても有難いです。

とおわでの生活は、やっぱり大変なこともあり、相変わらず小さなことにつまずいたりしています。けれども、土に触っているだけで落ち着いたり、元気になれたりします。この豊かなとおわで、心地良い畑仕事をしながら、もっと色々感じ、つくり、日々を丁寧に暮らしてゆきたい。

ひとのふるさとである土と自然とにつながって生き、そしてすでにそうやって暮らしている温かいひととと触れ合うこと――。それがしあわせを知ることにつながるように思えます。

（おおぐしたえこ／百姓見習い）



ウルマー・カンマー・アンサンブル 20年の歩み

磯村寿彦

ドイツ・ウルム市からの日本縦断ミニコンサート
ウルマー・カンマー・アンサンブル1998
Ulmer Kammer Ensemble 1998
■期日 8/5(水)19:30(開場18:30)～20:30(終演)
■会場(財)高知県文化振興事業団・ウルマー・カンマー・アンサンブル・今年で20回になります。親しみ深まりつつ、優れたテクニックに裏付けされたウルマーの伝統的音色の繊細美を存分にお楽しみください。
■会場 高知県立美術館ホール
■期日 8/6(木)19:00(開場18:30)～20:30(終演)
■会場(文)県・県立美術館事務局
■問合 社会福祉法人 桜・楽
プログラム
ウィンドミル
ウィンドミル
ドルフ
ドルフ
ブラームス
ボッシー
ヒッツマー
ヒッツマー
ロバーツ
ロバーツ
ロバーツ・シャ・ロクス
ロバーツ・シャ・ロクス
高知公演
■高知県高知市本町2丁目7-6 ■問合 佐川町公演
■佐川町文化ホール
■問合 佐川町教育委員会

1998年コンサート（高知では5回目）のチラシ

磯村寿彦（ヴィオラ奏者）
7歳よりバイオリンを始める。東京芸術大学卒業後、東京都交響楽団に入団。1971年ミュンヘン音楽大学に留学。1973年よりフィルハーモニーオーケストラ・ウルムに入団。妻の磯村みどり氏（フィルハーモニーオーケストラ・ウルム、第一バイオリン奏者）とともに、多くの室内楽活動を行っている。

三十八年ほど昔、私は妻と二人、西ドイツ・ウルム市立歌劇場に就職することとなり、ドイツでの音楽活動が始まりました。

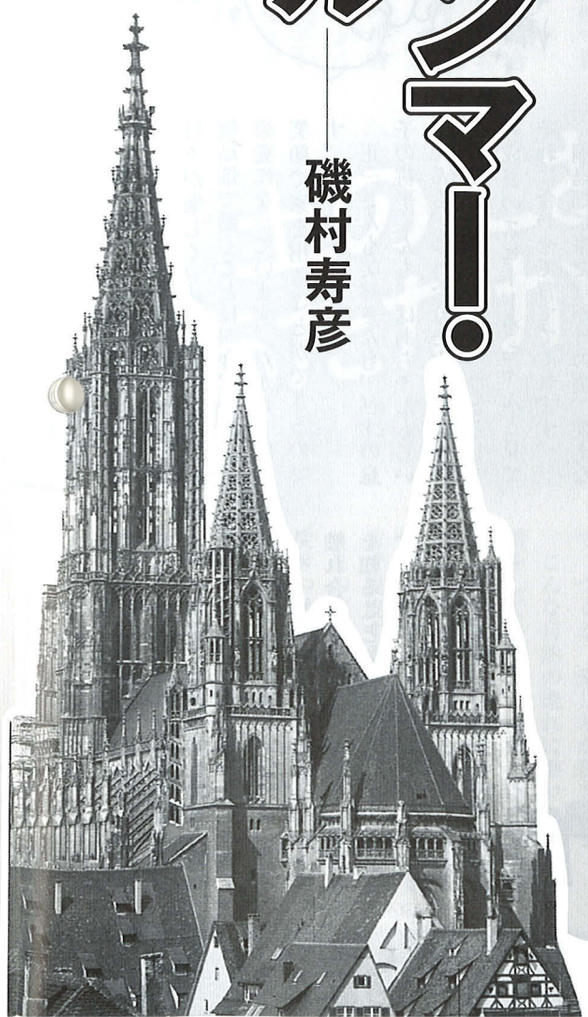
それ以前の六年間、東京都交響楽団に在籍し、オーケストラ生活は知っているはずの私達ではありましたが、演奏する側、観客、プリマドンナ、指揮者、総支配人…とまわりのすべてが新鮮で、毎日のオーケストラピットでの音合わせは堪らなく楽しいものでした。

私よりも半年前から市立劇場で働いていたファゴット奏者・杉本暁史さんと、オペラの終演後、劇場内のカンティーナ（食堂）で、日本人とドイツ人の気質の違い、音楽の作り方等を熱っぽく語り合う日が続きました。そのうちに何とかこの私達の気持ちを日本の音楽ファンの方達に知っていただきたいと本気で思うようになりました。

ちょうどそんな折、ウルム大学の研究室に来られていた高坂氏と知り合い、お互いの子供を通じ、また、高坂家でおいしい手料理をいただきながら、音楽好きなご夫妻との深い交流が始まったのです。私達の音楽に対する思いも真剣に聞いていただき、仲間が増えたような気分になったのでした。これがそもそもウルマー・カンマー・アンサンブル誕生の背景となったのです。

あの頃の日本のクラシックコンサートでは、オーケストラ、室内楽、ソロなどどんな形態の演奏会でも、客席を暗くし、聴衆は音を楽しむというより研ぎ澄まされた冷たい雰囲気の中にいたように思います。演奏家も求道者という感じで、音を楽しむというのでなく、どこまで厳しく追求しているかというのがポイントだったのでしょう。私達は楽しい肩の凝らないコンサートを提供しようと考え、一九八六年、日本の知人に頼んで企画していただきました。

演奏会ツアーをオーケストラの仲間達に呼びかけ、私達はウルマー・カンマー・アンサンブルとして日本の町や村で様々な編成の室内楽を二年毎に行ってきました。演奏ととも


世界で最も高い尖塔のウルム大聖堂

に杉本さんのお話を聞いていただくなど、生の西洋音楽が楽しめるように工夫しました。

日本の受け入れ側はまったくのボランティアです。一生懸命協力して下さり、一緒に行ったドイツ人達はスタッフの誠実な活動振りに感激していました。当時はホテルに宿泊することなど考えられない状況で、企画して下さった方々の家に一人ずつ分かれてホームステイさせていただきました。どの家庭でも手厚いおもてなしをいただき楽しい思い出ですが、今から考えると、ドイツ人達は言葉が通じないままよくにこにこ笑いながら接待に応じ、長いツアーの間頑張ってくれたものだと感謝しています。

一九八八年に「草の根コンサート」と銘打った松山のコンサートに、帰国していた高坂夫妻が高知から訪ねて来られ、感激の再会をしました。そして次回来日の一九九〇年には高知での初めてのコンサートを約束して下さいました。あの時の感激は、今も忘れることはできません。

それから世界情勢が大きく変わり、東西の壁も無くなりました。ウルムのオーケストラでも、危険を冒して逃亡して来た仲間が「ドイツ」国籍となって、自由に生まれ故郷に帰れるようになりました。

ルーマニアのオーケストラのコンサートマスターであったベルトークが、野を越え山を越えてウルムに辿り着いたのは一九八六年でした。路上で弾いていたバイオリニストの信じられないほど素晴らしい演奏が人々の耳に入り、噂が噂を呼び、アッという間に彼は人気者になってしまいました。

そんなある時、知人宅で一緒に室内楽を楽しんだ後、彼に日本でのコンサートに参加してくれる気があるかどうか尋ねてみたのです。日本では私達の知人が一生懸命ボランティアでコンサートを開いて下さる。航空券や日本での移動費は出して貰えるが、それ以上の収入は全く保証ができない、とことわって、ベルトークの日本行きはまとまったのでした。

彼は二〇〇〇年頃から自分の音楽家としての人生観を話してくれるようになりました。彼は人間にとって大切なことは感激することだと言います。音楽、文学、絵画等に心を奪われる人は他の社会、他の人間への愛をいっぱい持つことができるのではないだろうか？　世界中の子供達がこのような体験を、家庭で、学校で、社会でできるのが理想なのですが、貧困、戦争、多忙などで感動する心が萎えてしまっているのではないか？

彼自身、神から与えられたバイオリニストとしての使命は、コンサートを聴いて下さっている方々に音楽の感動を伝えることだと考えているようです。私達には彼が最初の音を出した瞬間から、彼の人生の喜び、哀しみ、あるいは苦しみも含めてそのまま音楽に反映されているように思えるのです。

私達は彼のバイオリンに心から感動し、二〇〇〇年頃から弦楽四重奏とピアノという編成で、ウルマー・カンマー・ゾリステンと名称を変え、現在のコンサートの形に至っています。そして二年に一回、ウルマー・カンマーのはじまりからかわらず支えて下さっている方々の素晴らしい企画のもとで、親戚に会いに来るような感じで私達は交流を味わわせていただいています。ドイツに帰ってからも、ベルトーク、ウングリアーヌ、ユリネック（今年はマイヤーが来日）のメンバー全員が日本で経験した小さな小さな事まで、大きな思い出として夢中で語り合っています。

杉本さんは今でもウルマー・カンマーを大切に育てていて、管楽器、声楽を中心に楽しいコンサートの普及に努めています。高知の皆様方にも、これからもウルマー・カンマーを支援していただけたら嬉しく思います。

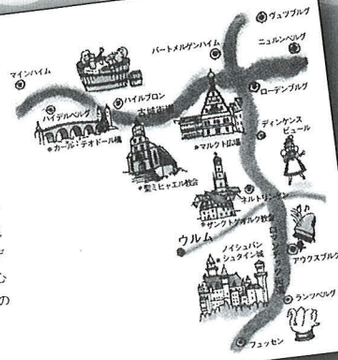
二〇一〇年五月二二日
ウルムにて

（いそむらとしひこ／ウルマー・カンマー・ゾリステン）

■ウルムの町

ドナウの源流から約100kmほど下った所にある最初の都市。ウルム、ノイウルム合わせて人口約15万人。町中を美しいドナウが流れています。

ここでは昔、世界的なアインシュタイン博士が生まれ、ウルムの歌劇場ではカラヤンがデビューし、又ゴシック建築では世界で一番高いミュンスター教会があります。南ドイツは、牧歌的な景色がアルプスに回って続き、スイスやオーストリーのチロル地方にも約100km程です。又ウルムの所属するバーデンヴュルテンベルク州は、科学技術の研究の中心地としての建設が行われ、ウルム大学と共にその充実が進められています。



鉄道っておもしろい！③

列車が動く道路になる

―自動車が列車に積まれてアルプス越え―

大内 雅博

今回はスイスのお話である。スイスの鉄道には見どころが多いが、列車が自動車を運んでいることは将来の交通を考える上で最も参考になると思う。

わが国でも二十年ほど前に「カートレイン」が多客期のみに走っていたが、予約が必要な特別な存在であり、いつの間にか消えてしまった。

スイスのカートレインは峠越えのための長大自動車トンネルの代用である。燃料を積んで走る自動車トンネルの火災は頭の痛い問題であり、防災のメインテーマのひとつである。「無軌道」な道路を走るすべての自動車が燃料を積んでいるというのは考えてみれば恐ろしい話である。一方、鉄道ならば信号制御で追突も防止できる。

レッチベルクトンネルを抜けてきたカートレイン

スイスでは長大トンネル内の運転を「軌道のある」鉄道に任せるシステムがあちこちで見られる。代表的なのはスイス・アルプスの一部であるレッチベルク峠を南北に結ぶカートレインである。この峠を貫通しているのは延長一四・六キロの鉄道トンネルのみで、高速道路どころか幹線道路も存在してない。トンネルを掘って直行する道路を建設する計画すらない。

鉄道のトンネルが一九世紀末に開通しているぐらいであるから現在の技術で道路トンネルを掘ることは可能である。道路トンネルが建設されないのは、一義的にはそれに見合う需要がないからであろう。

スイスのカートレインをもう一例ご紹介したい。ヨーロッパの経済統合により増大している、スイスを通過するだけの貨物輸送のための「トラック列車」である。

末端部分の集荷と配達は小回りの利くトラックが走行するが、途中のスイス・アルプス越えは新たに建設した全長三四・六キロのレッチベルク基底トンネルとスイス・イタリア国境の全長一九・八キロのシンプロントンネルを経由する列車でトラックをまとめて運ぶ。自動車の利便性と鉄道のエネルギー効率や低環境負荷を組み合わせたシステムである。

この「トラック列車」は「ローリング・ハイウェイ（Rolling Highway）」と呼ばれている。トラックを積む列車を、回転する車輪のついた道路に見立てた命名である。ドイツ最南部のフライブルグからイタリア最北部のミラノ近郊まで、距離四〇〇キロあまりを、搭載限度時刻から下車開始時刻までの間約十一時間で走行する。その間、運転手は専用車両でくつろぐことができる。まさにスイスを通過するための列車設定である。最大四二トンのトラックを積載可能である。

平日で一日当たり十往復、昼夜を問わずおよそ二時間間隔で運行されている。料金は一台当たり日本円に換算して六～七万円といったところである。高いように思われるかもしれないが、スイスを通行する貨物自動車には重量と距離に応じた「トラック通行税」が課される。スイスを横断する四〇トントラックでは約二万四千円必要である。そして燃料代も必要であるから（高速料金はタダみたいなもの）、「ローリング・ハイウェイ」は経済的な手段となる。いつ見かけてもこの列車は常にトラックを満載して走っている。

ここでわれわれが参考にすべきことは、スイスでは鉄道と道路が協調して効率的な交通体系を作り上げているという事実である。鉄道と道路はライバルではないのである。

（おおうちまさひろ／高知工科大学准教授）

レッチベルク基底トンネルを抜けてきたトラック満載の「ローリング・ハイウェイ」

貨車に固定されたトラック

言葉の現場から 22

「舞姫」のなぞを読み解く(2)

広井 護

森鷗外「舞姫」の冒頭である。

> 石炭をばはや積み果てつ。中等室の卓のほとりはいと静かにて、熾熱灯の光の晴れがましきもいたづらなり。今宵は夜ごとにここに集ひ来るカルタ仲間も「ホテル」に宿りて、船に残れるは余一人のみなれば。

踊り子エリスを捨てて、天方伯爵とともに日本に帰国する太田豊太郎が、セイゴン港に停泊する船の中で回想を始める場面だ。

あるとき、生徒から次のような質問を受けた。「余（豊太郎）は、なぜ一人で船に残っているのですか？」

思ってもみなかった質問で、答えることができなかった。ところが今では、この「なぜ」には作品の根本にかかわる意味が隠されていると考えるようになった。そして次のように授業を展開している。

T「この部分、逆に考えてみよう。余以外の船客たちは、どうして船を降りて、ホテルに泊まったのだろう？」

P「……」（答えられない。）

T「船客達が泊まるホテルでは何料理が出ると思う？」

P「ベトナム料理。」

T「と思うでしょう。ところが違うんです。この時代のベトナムはヨーロッパのある強国の植民地でした。何という国でしょう。」

P「イギリス。」

T「…ではありません。ヒント。ベトナムのことを〝インドシナ〟って言ってました。」

P「あっ、仏領インドシナ。…フランスだ。」

T「ということは、ホテルで出されるのは？」

P「フランス料理。」

T「そう。この時代サイゴン――今のホーチミン市は、〝小パリ〟と呼ばれていたんだ。港のまわりにはフランス人が経営するホテルが建ち並んで、パリを思わせる華やかさだったそうだよ。で、さらに想像して下さい。フランス料理のあるところには、どんな飲み物が出されるだろう。」

P「あ、ワイン。」

P「シャンパン。」

P「ブランデー。」

T「そうです。そして、そういうお酒のあるところには、誰がいる？大人むきの質問でごめんなさい。」

P「女の人。」P「ホステスさん。」

T「そう。美しい女性もいっぱいいるはずだ。だから、みんな船を降りるんだね。第一、ホテルだと船酔いの心配がないからね。――すると、変なことに気がつくだろう。何が変？」

P「どうして、豊太郎は一人だけ中等室に残っているのかってこと。」

T「そうだね。この船には、上司の天方伯爵も親友の相沢謙吉も乗っている。彼らは下船するときに、当然どうしたと思う？」

P「豊太郎を誘った。」

T「そう。いっしょに降りようと誘ったはずだ。なのに、豊太郎は一人で中等室に残っている。つまり豊太郎は、誘いを？」

P「断った。」

T「何と言って断ったの？」

P「…体調が悪いので、とか。」

T「だったら、陸の病院に行こうって言われるだろう。これは、強くきっぱりと断ったはずだ。『私には船に残ってしなければならないことがあります』と。…実際、豊太郎にはすることがあったんだ。それは何でしょう？」

この問いに対する答えは、冒頭から少し離れた部分に隠されている。

> こたびは道に上りしとき、日記ものせんとて買ひし冊子もまだ白紙のままなるは……省略……いで、その概略を文につづりてみん。

つまり豊太郎は、エリスとのいきさつを、白紙の冊子につづるため、船に残ったのである。つづることによって、自分の心を整理しようとしていた。だが、冊子に向かった豊太郎の筆は動かなかった。つらくてつづることができなかった。そのとき、船内が静まり返った。石炭の積み込み作業が終わったのだ。「石炭をばはや積み果てつ。」――しまった。このままでは、心の整理をつけないままに、日本へ帰国することになる。この緊迫した思いから「舞姫」という物語は語られ始める。冒頭の一文には、こういう切迫感がこめられている。奥の深い一文である。

（ひろいまもる／土佐高校教諭）

GAIA CUATRO Japan Tour 2010
WORLD JAZZ×AURORA DANCE

5月7日(金)かるぽーと小ホール

日本とヨーロッパ各国で精力的な活動を行う、国境を越えた音楽家4人によるジャズユニット・ガイアクアトロの演奏に、写真家・中垣哲也さんの映像をコラボレーションした「WORLD JAZZ × AURORA DANCE」を開催しました。ガイアクアトロの今回の日本ツアー15カ所のうち、このオーロラ映像とのコラボレーションは高知を含んで3カ所のみというスペシャルプログラムです。

ガイアクアトロはバイオリニストの金子飛鳥を中心とするカルテット。アルゼンチン出身のピアニストのヘラルド・ディ・ヒウスト、異色のパーカッショニスト・ヤヒロ　トモヒロ、アルゼンチン出身のベーシストで南米音楽を継承するカルロス・ブスキーニと、いずれも幅広いジャンルで活躍しているメンバーばかり。様々な国のリズムなどの音楽要素をとりいれた4人の演奏に、エモーショナルな金子飛鳥のボイス・パフォーマンスが絡み、会場が徐々に熱を帯びていきます。

オーロラや星空、極北の自然がステージいっぱいに映し出され、客席は地球の壮大さに息を呑みます。揺らぐオーロラの中に演奏者が幻想的に浮かぶうちライブは最高潮に達し、最後は大きな拍手と歓声に包まれました。

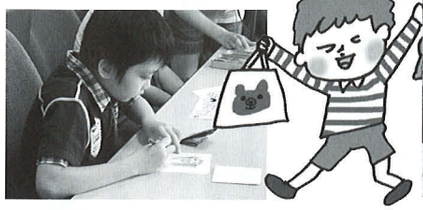
小ホールが大きな宇宙になった一夜でした。

高知市文化振興事業団

5月～6月の事業から

第62回高知市展 美術体感イベント あなたダビンチ ぼくピカソ

6月6日(日)かるぽーと前広場・中央公民館

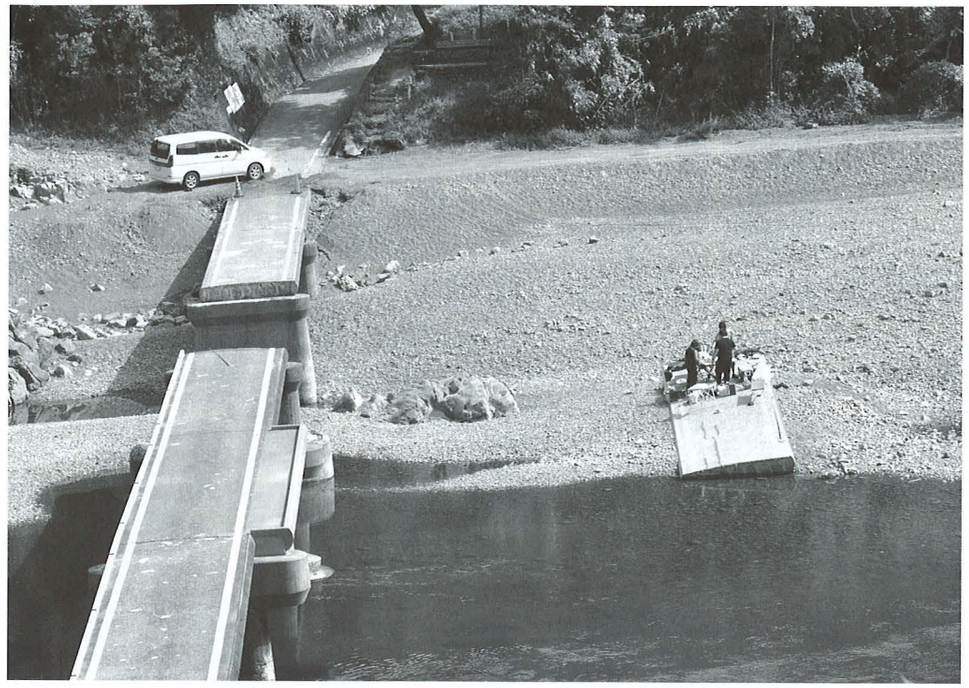


第62回高知市展（5月29日～6月13日）の会期中、恒例の美術体感イベント「あなたダビンチ ぼくピカソ」を今年も開催。毎年この日を楽しみにしている小学生も多い、美術で遊べる人気のイベントだ。こどもたちはというと…。

最初に行ってみたのは「エコ・アート・マーケット」。植木鉢に絵の具で色を塗って持って帰れるコーナーだ。さすがに人気のコーナー、人がいっぱいだ。ほっぺたや腕に絵を描いてる人もいる。ボディペインティングって言うんだって。次は、お隣のテント「筆と遊ぼう」でうちわをもらった！　自分の好きな字を書いて、さっそく今日から使おうかな～。お！すごい列ができてるなー、「エコバッグに絵を描こう」コーナーだ。ちょっと待ったけど、いい買い物袋ができたぞ。絵の具といっしょに墨を使ってるのがかっこいいかも。さて、次はと…「字は楽しく書くのが一番」コーナーだ。先生にきれいな字の書き方を教えてもらってちょっとお得。これで5つのテントで体験したけど、まだ2つあるぞー。自分でデザインした型で作った「せっこうメダル」が乾くまで時間もあるし、全制覇に向けてかるぽーとの建物の中に入って行こう。

9階に着いたら、みんなかわいいキーホルダーをぶら下げて歩いているな～。「キーホルダー作り」だ。外と違ってクーラーが効いてる部屋でプラスチック製のオリジナルキーホルダーの完成だ。さあ、最後は10階の「粘土で遊ぼう」コーナーに行くぞ。粘土を触るのって気持ちいいな～。大好きな恐竜を作って自分の部屋に飾ろうっと。ちょっと難しいところがあっても、やさしそうな先生がヒントをくれるから大丈夫大丈夫。

ふ～、全部回れたー。今日半日でいろんな美術を体験できておもしろかったな～。また来年もやるみたいだから、絶対行こうーっと！



8月上旬の洪水で流れた長生沈下橋。橋桁の上で若者が遊んでいました。

高知を撮る

第26回写真コンテスト入賞作品

流れた橋桁

（平成21年9月14日　四万十市西土佐）

宮村　理生

「報酬のない忍耐」

風俗歳時記

使い捨ての紙おむつが使われだして、かれこれ半世紀になる。今では高吸水性ポリマーや不織布などが使用され、必ずしも紙のみが使用されているわけではないことから、「紙おむつ」でなく「使い捨ておむつ」の呼称が広がっているが、依然紙おむつと呼ぶ人が少なくない。

ともあれこのおむつは、清潔で排泄後も乾燥した感覚で、不快感がないことがよろこばれる。今の子どもは、昔の子どものように、濡れおむつの不快に耐える必要がない。それを知らないで成長する。

便利と効率が何より価値観の時代にぴったりのもので、この普及に文句はつけられない。今は、昔の母親たちの労苦を偲ぶだけだが、少し気になるのは〈耐える〉ことの人間形成に持つ意義についてである。

私たちの子どものころは、日常生活すべてが、多かれ少なかれ〈耐える〉ことをぬきにしては考えられなかった。冒頭の濡れおむつの不快もさることながら、身近な例でいうと通学がそうだった。今でも徒歩通学は当たり前で、どこが違うのかといわれそうだが、当時の田舎では学校まで数キロというのはざらで、ときには十キロ以上の道を二時間以上かけて通学するものもいた。六歳の一年生のときから、雨の日も雪の日も例外はなかった。

また、たまに町に連れて行ってもらうのも楽しみだったが、その道中は必ず歩いたものだ。その労を厭うと町に出る楽しみはない。買ってもらえるものはせいぜい駄菓子ぐらいのものだったが、それがうれしかった。

しかしそれは、町まで歩いたことの報酬として買ってもらったのではない。歩くことの負荷は、生活をなり立たせる当然のもので、それに報酬などあろうはずはない。あったとすれば、知らず知らずに身につけた「報酬のない耐えること」の大切さだった。

今の子どもたちは、どこでそのことを学んでいるのか。（恭）

ミュージカル アトム

© TEZUKA PRODUCTIONS

宝くじ文化公演 わらび座ミュージカル「アトム」

１０月６日（水）　18:30 開演（開場 18:00）

高知市文化プラザかるぽーと 大ホール

全席自由　一般前売り 2,000 円（当日 2,500 円）
高校生以下 1,000 円（当日 1,500 円）

日本のオリジナルミュージカルを上演している劇団わらび座が、手塚治虫の「アトム」をミュージカル化。日本の一流スタッフによる舞台を、宝くじの助成により特別料金でご覧いただけます。

JAZZCHOR FREIBURG

in Kochi 2010

ドイツ・フライブルク市を拠点に、世界中で活躍するジャズコーラスグループ、「ジャズコァフライブルク」の3年ぶりの高知公演。
大編成ならではのボーカルスイングが、オリジナルにアレンジされた名曲を刺激的に歌い上げます。
会場ロビーにはドイツビールの販売コーナーも構えます。
少しオシャレして、とてもクールでちょっとやんちゃな夜を楽しみませんか?

2010年8月31日(火) 18:00開場 19:00開演
高知市文化プラザかるぽーと 大ホール

全席自由 前売り3,000円 当日3,500円

お問い合わせ
高知市文化振興事業団 088-883-5071

今号の表紙

「水の環（わ）」

植木栄造

小さい頃、海岸や川原で石のように丸くなったガラスを拾いました。

『自分らしいガラスを』と考えるとき、どこかでいつも、あのガラスの力強さと柔らかなラインを思い浮かべているような気がします。

（うえきえいぞう／ガラス作家）

風俗

すき間収納

この三月に一軒家に仕事場を引っ越した。土に近く緑に囲まれて快適な環境なのだが、収納スペースがほとんど無い。これまで二部屋も収納スペースに充てていたので、資料や本をはじめさまざまなモノの行き場に困った。

今回の引っ越しを機に、それらをほとんど処分しなければならなかった。不要なものを処分して、本に至っては五分の一ほどになった。それでも新しい仕事場には入りきらないモノが残った。本だけではない。歳をとると、思い出と共に他人にはゴミとしか映らないようなモノも次第に増え、ゴミに埋もれた老いぼれの自分を想像してゾッとする。捨てるにこだわったことはないが捨てるに捨てられない性がある。歳をとればとるほどその性は強くなるようだ。

では入りきらないモノはいまどうなっているか。本棚では手あかにまみれた往年の名作が二重になっているし、引っ越しを手伝ってくれた友人が「材木屋か」とつぶやくぐらい集まってしまっていた板切れや棒切れ、その他の処分を免れたモノや思い出の品を、机の下や本棚と壁の隙間に「隠して」しまった。いわば「すき間収納」である。一見片付いているようでも、イザとなれば次々とマジックのようにモノが出てきて、収拾がつかないはずだ……。このままわたしが死んでしまったら、とんでもないところから信じがたいモノが出てきて、周りの者は苦笑するに違いない。こんな状態を「収納」などというつもりはないが、自分の「老い支度」は気持ちの上でも持ちモノからみても、こんなふうに中途半端で不完全なままで終わりそうである。（霖）

文化高知 No.156 [隔月発行] 2010年(平成22年) 7月1日発行

財団法人 高知市文化振興事業団
〒780-8529 高知市九反田2番1号
TEL(088)883-5071/郵便振替01680-5-14869

解説書・字幕スーパー付き／伊語 全4幕

9/15(水) 開場▶18:00 開演▶18:30 高知市文化プラザかるぽーと大ホール

料金(全席指定)	
S 席(1・2階)	9,500円
A 席(3階)	8,500円
第2バルコニー席	5,000円
第3バルコニー席	3,000円
第4バルコニー席	2,000円

※6月12日(土)より発売

■前売り券販売所
高知市文化プラザミュージアムショップ… 088-883-5052
高新プレイガイド…… 088-825-4335
高知大丸プレイガイド…… 088-825-2191
高知県立美術館ミュージアムショップ…… 088-866-8118
イオンモール高知…… 088-826-8000

※バルコニー席については高知市文化プラザでのみ販売いたします。
※未就学児童の入場はご遠慮ください。
※身障者手帳、療育手帳、障害者手帳所持者とその介護者1名は、左記料金より3割引でご購入いただけます。

■通信販売
直接購入が出来ない方は通信販売をご利用ください。必ず電話(088-883-5073)にてご予約の後、郵便振替口座[加入者名:(財)高知市文化振興事業団 口座番号:01680-5-14869]に公演名・券種を明記の上、チケットの合計金額と送料430円を合計した金額をご入金ください。入金確認後、簡易書留にて発送いたします。

主催:財団法人高知市文化振興事業団・高知新聞社　助成:財団法人地域創造
後援:オーストリア大使館・NHK高知放送局・RKC高知放送・KUTVテレビ高知・KSSさんさんテレビ・KCB高知ケーブルテレビ・エフエム高知

高知市文化プラザ かるぽーと

財団法人高知市文化振興事業団　http://www.bunkaplaza.or.jp
お問い合わせ 088-883-5071　通信販売 088-883-5073

宝くじは
豊かさ築く
チカラ持ち。
宝くじは、広く社会に役立てられています。